

論文

政策移民のアイデンティティ形成に関する 人類学的研究

——私信集の分析を手がかりに——

孫 潔

〔抄 録〕

本稿では、複数の私信を収録した出版物である『攀枝花三線建設家書選』を手がかりに、個人的自己、関係的自己、集団的自己という三つの水準において、中国における政策移民（政策によって移動を余儀なくされた人々）のアイデンティティがどのように形成され、またそれが私信においていかに映されているのかを明らかにする目的とする。また、プライベートな文書である私信が、編集され出版されることになって、その過程におけるポリティクスを視野に入れて考察することを試みる。

キーワード：政策移民 アイデンティティ 私信

一. はじめ

中国では一九六四年から一九七〇年代に至るまで、大規模な政策移民（政策によって移動を余儀なくされた人々）を伴った「三線建設」という国家的なプロジェクトを展開していた。それは全面的核戦争を想定し、沿海部の工業基地を「大三線」、つまり陝西、甘肅、寧夏、雲南、貴州などの地域へ、また内地の企業を安徽、江西と山東の「小三線」へ移転させ、全国的に工業の配置を新たに調整したものである。一九八〇年までに三線地域に移住させられた政策移民は四百万人にも上る。こうした人々の新天地での仕事や生活については、近年では主にライフストーリーや口述史として記録され、また研究対象になってきた。しかし、歴史を体験した移民当事者自身によって語られたライフストーリーは、過去への回想であるため、記憶の変容あるいは欠落による不確定性、またその都度の取捨選択によって、断片的で限定的なものだと言える。そのため、こうしたライフストーリーを検証するために、当時の公文書や新聞、他人の証言、また本人の日記や私信なども調査対象とされている。そのうち、個人が家族や友人などの他者に書いた手紙としての「私信」は、送受信者の間でやり取りされており、感情を共

有したり情報を伝えたりする非公開のコミュニケーションである。政策移民が私信を仲介にして、いかに自己の属性を他者に呈示しているのか、また彼ら自身のアイデンティティは私信にどのように映されているのかについては、非常に有意義な研究テーマになりうると思われるのだが、管見の限りでは、圧倒的に少ないのが現状である。

人間は常に「自分は何者であるか、自分は何をすべきか」という問いによって自己を意識している。一九五九年に Erikson がこの問題を「アイデンティティ」という概念、特に青年期における個人の心の中に保持される自己同一性として提唱した (Erikson 1959=2011)。それ以降、アイデンティティについて、国内外で数多くの研究がなされてきた。人類学においては、主に人種、民族、ジェンダーなど、社会的に抑圧されがちな特定のマイノリティを研究対象にして、彼/彼女らが異文化との接触を通して、自民族のエスニック・アイデンティティや地域アイデンティティなどがどのように構築されてきたのかは重要な研究テーマの一つである (嶺崎 2013: 204~224頁など)。これらの研究は構築主義の立場から、相互行為を通して構築される、流動的で複合的なものとしてアイデンティティを捉えている。こうしたアイデンティティの捉え方は、Erikson の「自己アイデンティティ (self identity)」という概念に遡ることができる (Erikson 1959=2011)。すなわち、自己アイデンティティは、社会的役割や他者との関係の中で承認されることで確立される⁽¹⁾。民族アイデンティティや地域アイデンティティなどは、いずれもあらゆるアイデンティティの一つにすぎず、必ず当事者自己との関わりにおいて問題が浮き彫りにされる。そのため、人類学においても、アイデンティティの形成過程に着目して考察する必要があると筆者は考えている。

心理学においては、Markus と Kitayama が個人の社会化プロセスにおいて文化的要素による影響を分析し、「自己観 (self-construal)」という概念を提起した (Markus & Kitayama 1991)。つまり、自己についての理解ということである⁽²⁾。この理論を土台にして、Sedilides と Brewer たちはすべての人間が自己を捉えることにあたって、次の三つの水準からの把握が可能であると指摘している。すなわち、社会的環境の中で他者と区別できる自分自身の特性に焦点を置くものを「個人的自己 (individual self)」、重要な他者との関わりの中で経験される自己を「関係的自己 (relational self)」、また個人にとって集団や組織に対するメンバーシップの大きさに基づいて認知される自己を「集合的自己 (collective self)」と定義したのである (Sedilides & Brewer 2001)。この考え方は、自己と他者=社会との相互作用によって形成されているアイデンティティを考察する際に、どの水準で他者、あるいは社会を捉えるべきかについて、具体的な方向性を示していると思われる。

従って、本稿では三線建設に参加した政策移民とその家族との間で交わされた私信を手がかりに、上述した「個人的自己」、「関係的自己」及び「集団的自己」といった三つの水準において、政策移民のアイデンティティがどのように形成され、またそれが手紙においていかに映されているのかを明らかにする目的とする。加えて、プライベートな文書である私信が、編集さ

れ出版されることにともなう、その過程におけるポリティクスを視野に入れて考察してみたい。

二. 私信を研究対象とする先行研究

文化人類学においては、フィールドワーク、つまり調査者による参与観察はこの学問分野のアイデンティティと言えるほど主要な調査方法で、文字資料は副次的な地位を占めていた。被調査者自身が自分の言語を使用して書いた文字資料、いわゆる現地の文字資料をメインの資料として利用し行われた人類学的な研究は限られている。とりわけプライベートな文書である日記や私信に関する研究は稀である。一九六七年に、『マリノフスキー日記 (A Diary in the Strict Sense of the Term)』が刊行されると、調査地の人々とのラポールの重要性を唱えたマリノフスキーが実際には調査地の人々に対して嫌悪感や敵対感を抱いていたということが話題となり、フィールドワークにおける人類学学者の姿勢や自己認識が再検討された (Geertz 1976、谷口 1986など)。

個人間の私信は社会生活史の資料として、近年人文学においては注目を集めてきた。スタンリー (Stanley, L.) は手紙の特徴を次の三点にまとめた。第一に、手紙は対話的である。手紙はある人と他の人との間のコミュニケーションや交換である。送り手と受け手の間で展開されるやり取りによって、アイデアの発想や関係の構築、また二者間の相互理解が形成される。第二に、手紙は視点的である。手紙の構造と内容は特定の受取人や時間の経過に応じて変化する。第三に、手紙には強く「浮上する」特性がある。それは研究者が決めた関心事によって引き起こされたり、構造化されたり、内容が充填されたりするものではない。それよりむしろ、手紙には独自の関心事や慣習、倫理観が存在している (Stanley, L. 2004: 202-203)。すなわち、手紙を社会的相互作用の側面から捉える可能性を示したのである。一方、個人間の私信は過去の私物として紛失されたものや、プライバシーの関係で他人に見せたくないものなどが少なくない。研究者の立場からみれば、上述したような副次的な地位を占めた文字資料であり、かつ不完全なものが多く、研究対象のプライバシーと絡んだ研究倫理などの理由により、従来では私信をメインにする研究は圧倒的に少なかった。

中国における私信に関するこれまでの研究では、主に二つの傾向が見られる。一つ目は、特定の送信者と受信者が長期間に亘って行なった私信のやりとりに関する研究である。李と閻はある夫婦間の六七九通の私信 (一九六一～一九八六年) に基づいて、集団体制時代における社会主義的な新人への改造運動では、人々は政治的言説である「新人改造」をいかに家族の権力闘争に応用してきたのかを分析した (Li & Yan 2019: 88-110)。また魏瀾と張楽天はある知識青年夫婦間の一九七二年から一九九五年までの九二二通の私信への分析を通して、「故郷上海への帰還」という目標を達成するために、彼ら自身及びその家族が家庭主義を土台にして、い

かに「社会関係」作りをしてきたのかを考察した（魏、張 2021：27-55頁）。二つ目は、不特定の数人の私信を通して、当事者の置かれた社会背景や生活状況を検証する研究である。譚は私信を通じて深圳の「打工妹（農村から都会への若い出稼ぎ女性）」の日常生活、居住している生活環境や職場への不満、及び未来への憧れなどを読み解いた（譚 1998：63-73頁）。また、張楽天は一九五〇年代の私信を分析し、当時の中国の若い知識青年が新政権を受け入れ、共産党を擁護した理由を、彼らがそれに「希望」をうかがうことができたからだと結論づけた（張 2017：104-112頁）。

中華人民共和国が成立した初期の一九五〇年から一九八〇年代まで、集団体制時代の中国社会では、社会体制によって別居せざるを得なかった夫婦や、社会主義による「改造」で辺境地域や農村へ赴いた知識青年と故郷に残った彼らの親、兄弟、友人との間では、私信は往々にして家族、友人がコミュニケーションを取ることができる不可欠な、場合によっては唯一手段であり、さらに政府の検閲を避けられるため、重要な役割を果たしていたツールでもあった。それにも関わらず、その時代の出来事に関する従来の人類学においては、文字資料よりフィールドワークを重視する学術的伝統が踏襲されており、調査対象へ聞き取り調査を行い、彼らの過去への回想を語ってもらう、つまりライフストーリー研究が圧倒的に多かった（呂・莫 2021など）。そのうち、私信に触れたことにしても、その当事者のライフストーリーの一部分のみとして扱われて、それが生み出された社会環境や、私信を通して構築してきた送り手と受け手の関係についてはほとんど言及されていない。一方、歴史的事実に関する当事者へのインタビューにおいては、本人の過去への記憶の不確定性、過去から現在に至るまでの人生経験に左右される歴史への再解釈などによって、本人の体験したことや当時の心境をどこまで忠実に反映できるのかは問題視すべきであると思われる。

以上の先行研究と問題点を踏まえ、本稿では中国三線建設において最も大きな鉄鋼工業基地である攀枝花鉄鋼工業基地の建設に参加した政策移民たちの私信を収録した出版物をメインの研究対象とし、私信に書かれた内容を読み解いて、当時の社会状況を再現した上で、彼らの個人的自我、関係的自我、および集団的自我がどのように形成してきたのかを明らかにすることが目的である。

本稿は主な研究対象とするのは、二〇二一年に出版された政策移民の私信集『攀枝花三線建設家書選』である。この書物は攀枝花鉄鋼基地建設に参加した政策移民によって書かれた、一九六五年から一九八〇年までの私信を三五通収録した書物である。本稿ではこの私信集の内容を分析する上で、二〇二三年二月と八月に行ったフィールドワによって収集した私信、及び聞き取り調査で得た情報と参照しながら、政策移民のアイデンティティの形成を考察してみたい。

三. 攀枝花地域における三線建設と毛沢東

(一) 攀枝花地域における三線建設の歴史

攀枝花市は中国四川省の最南端に位置しており、元々「渡口」と呼ばれた地域である⁽³⁾。一九六〇、七〇年代「三線建設」期間においては、ここには豊富な鉄鉱石資源があることに加え、交通不便な山奥に位置していたため、鋼鉄の生産をめぐる大型な工業プロジェクトを建設する場所として選ばれた。一九六四年から攀枝花鉄鉱の開発が開始され、都市建設も始まった。攀枝花鉄鋼工業基地は中国における「三線建設」の代表作といえる大型プロジェクトである。一九六五年三月、中国共産党中央と国務院の正式な認可を得て、攀枝花特区が設立された。その後の四月に渡口市と改められたが、一九八七年に攀枝花市に改称した。攀枝花地域における三線建設については、一九六四年に鉄鉱開発の開始、つまり三線建設を境に、地質調査による鉄鉱資源の存在が判明した段階と、鉄鉱資源を開発し鉄鋼工場を中心に一連の工場が建設された段階との二つに分けることができる。

1) 鉄鉱資源の存在の判明

攀枝花周辺の鉄鉱資源の存在は一九三〇年代後半の地質調査により判明した。一九三四年から、攀枝花の鉄鋼の父と称される地質学者の常隆慶が金沙江一帯の山間部で地質調査を開始しており、一九三七年九月に彼の著した『寧属七県地質鉱産』が出版された。一九四〇年六月、地質学者の湯克誠が攀枝花地域で偶然、鉄の粒を発見した。彼はすぐ助手とともに地質調査を行い、鉄鉱石分布の地図を描いたうえで、『西康省塩辺県攀枝花及倒馬坎鉄鉱区地質報告』を発表した。この報告書は攀枝花地域のバナジウム、チタン、マグネタイトの埋蔵状況について、はじめて系統的かつ正確に鑑定したものである（朱 2020：21-22頁）。

一九四九年十月の中華人民共和国建国後、中央政府は全国で地質大調査を行った。攀枝花は先行調査が行われた地域として重要な調査対象地域に選ばれた。一九五四年から大規模調査を経て鉄鉱石などの埋蔵量が明らかになってきた。当地域の鉱床は長さ一九キロメートル、幅二キロメートルで、石炭や金属の埋蔵量が十億トンほどある。そのうち、鉄鉱石の埋蔵量が七億トンで、二酸化炭と五酸化バナジウムの埋蔵量がそれぞれ八百万トンと二百万トンあると判明した（朱 2020：23頁）。しかし、それらの埋蔵量は報告書にまとめられ、一九五八年に全国鉱産蓄量（埋蔵量）委員会に提出されたが、「交通不便、目下利用しない」という結論が出され、攀枝花での製鉄所建設の審議を通過しなかったということである（呉 2002：183頁）。

一九五八年に全国における製鉄フィーバーは最高潮に達した。各地に小型溶鉱炉「土法高炉」が作られ、農村の労働力を総動員し、都市部の住民にも過酷な労働を強いて、鉄鋼を大增産しようという鉄鋼生産の大躍進は全国を席卷した。この影響を受け、一九五八年三月に四川省成都市で行われた中共中央政治局拡大工作会議（“成都会議”とも呼ぶ）においては、当時

の冶金部長王鶴寿が毛沢東へ攀枝花鉄鋼製鉄所の建設を提起し、毛は製鉄所の建設プランを許可した。当時、中国西南地域においては、大きな鉄鋼基地がまだなかったので、西部地域の重工業を発展させるには非常に有利であると毛が判断したからである。したがって、毛の指示通りに西昌鉄鋼会社が設置された。一九五八年後半、全国から八万人が召集され攀枝花に赴き、地質調査、鉄道建設や冶金技術研究などが行われるようになった。残念ながら、大躍進と三年自然災害時期⁽⁴⁾に基本建設の縮小が行われる中、一九六二年三月二十四日、調整政策の一環として、西昌鉄鋼会社の建設は停止されていた（鐘 2016）。

2) 鉄鋼工場の建設を中心とする攀枝花地域の三線建設

一九六四年、全国における三線建設プロジェクトの展開にともなって、攀枝花鉄鋼製鉄所の建設は再開されることになった。向の研究によると、当地域の三線建設は主に三つの段階に分けることができる。第一段階は一九六四年から一九六六年までの第一回の建設ブーム、第二段階は一九六七年から一九六八年までの文化大革命による建設の停滞期、第三段階は一九六九年から一九七四年までの第二回の建設ブームを迎えた時期にあたる（向 2010：38－57頁）。そのうち、第一段階は非常に強い勢いで建設が展開され、最も多くの成果をあげた三年間であった。まず、予定より二年ほど前倒して、攀枝花地域においては一九六五年末までに、道路、電気、水路、住宅などを完成させ、インフラストラクチャーを整えた。そして、攀枝花工業基地の基幹プロジェクトの建設も前倒して開始された。一九六六年末までに、攀枝花工業基地は鉄鉱石鉱山、石炭鉱山、発電所、セメント工場、交通輸送などの建設においていずれも素晴らしい成果を上げたということである（渡口総指揮部 1967：29頁）。

一九六九年三月にはじまった「珍宝島事件」⁽⁵⁾は、瞬く間に中国全土を臨戦態勢に追い込んだ。その影響で攀枝花工業基地は全国よりも早く文化大革命による建設の停滞期を終え、一九六九年からは建設が再開した。第二回の建設ブームでは、主に「出鉄（鉄鉄が生産できる）」、「鍊鋼（製鋼できる）」、「成材（鋼材作りできる）」に重点が置かれ、様々な「大会戦」が展開された（向 2010：55頁）。「大会戦」とは、カネ・モノ・ヒトを動員し、技術移転、設備開発や工場建設など個々のプロジェクトの建設に適用させて大衆運動としてプロジェクトを実施するという、全国の三線建設においてよく使用された建設方法である。攀枝花鉄鋼基地を建設する大会戦には国务院関連各部から五万人の職員・労働者、さらに鉄道兵、鞍山鉄鋼、武漢鉄鋼と重慶鉄鋼など製鉄所からの技術者・労働者・幹部を合わせて十数万人の建設部隊が投入された（馬 1998：263頁）。

以上の努力により、一九七〇年七月一日に攀枝花鉄鋼工場でははじめて高炉（溶鉱炉）から鉄水（鉄鉄）を生産できた。一九七一年十月一日、中国最大一二〇トンの転炉を立ちあげ、鉄鋼が製鍊できるようになった。これによって、中国西部において大手の鉄鋼企業がないという歴史を終了させた（朱 2020：35頁）。さらに、一九七四年八月、鉄鋼鋼材一五〇トンの生産能

力を備えるようになった。これで「出鉄」、「鍊鋼」、「成材」といった重要な任務が完了し、攀枝花工業基地の建設は段階的に成果を上げたことになる（向 2010：56頁）。

また、鉄鋼基地の建設にともなって、三十数万人の政策移民が攀枝花地域に移住してきた。建設を開始する前の一九六四年には地元民が八万人ぐらいたったが、一九六五年末には一二万人となった。一九八二年の全国第三回人口センサスによると、市の中心部に居住している三三万余人が三線建設の政策移民や、就職、商売などで移住した移民及び彼らの子孫で、市内総人口の九九・五パーセントを占めた。そのうち、約四割は四川省外から移住してきた人々で、残りは攀枝花地域以外の四川省内から移住してきた移民であった（四川省攀枝花市誌編集委員会 2007：135頁）。攀枝花鉄鋼基地建設に参加した政策移民は、鞍山鉄鋼や武漢鉄鋼など他の鉄鋼工場からの技術者や職員、また退役軍人、中学校や大学の卒業生及びその周辺地域の若者や農民たちであった。

（二）毛沢東の攀枝花鉄鋼工業基地建設への執着

天然資源である鉄鉱石からさまざまな鉄鋼製品を生み出し、さらに製鉄所の建設と拡張による鉄鋼製品の安定供給は多くの国にとって、社会発展を支え、また産業革命を前進させるためには不可欠である。鉄鋼業は国家近代化の始まりだと言っても過言ではない。特に社会主義諸国では、鉄鋼は近代社会主義を象徴する聖なる原材料であり、鉄鋼生産量は宗教的な熱情をもって語られる魔法の数字で、国の進歩の度合いを示すものであった（フランク・ディケーター 2011：106頁）。中華人民共和国建国直後から、毛沢東は重工業、特に鉄鋼工業の建設を強調し、これを国民経済の発展の基盤であり、国家の近代化を実現するための重要な前提と条件だと見なした。一九五十年代後半期になると、毛沢東は鉄鋼建設への熱情をさらに高め、鉄鋼に取り憑かれていたようだった。全国各地に小型溶鉱炉「土法高炉」が作らせ、農村の労働力を総動員し、都市部の住民にも過酷な労働を強いて、鉄鋼を大増産しようという鉄鋼生産の大躍進は全国を席卷した。

毛沢東による攀枝花製鉄所の建設との関わりとされる記述は、一九五八年三月の成都会議においてなされたものである。当時の地質部部長であった李四光から四川省攀枝花に大きな鉄鉱があるとの報告を受けた毛沢東は、非常に喜んでいた。そして、その会議において冶金部から提起された攀枝花鉄鋼製鉄所の建設の案件に毛は許可を下したとの記録がある（張明 2021：10頁）。その後、毛沢東が攀枝花製鉄所また鉄鋼工業基地建設について直接言及したことは以下の通りである。

一九六四年五月十〇日から一日にかけて、毛沢東は国家計画委員会の第三次五カ年計画案に対してコメントを付けた。その内容では、とくに「酒泉と攀枝花の鉄鋼工場はやはり作らねばならない。造らなければ私は安心できない。もし戦争が起きたらどうするのだ。攀枝花が建てられないと、私は眠れない（攀枝花建不成，我睡不好覺）。」と訴え、攀枝花工業基地建設へ

のこだわりを見せてきた。

そして、一九六四年五月二七日、毛沢東は中南海で行われた中央政治局会議において、三線建設および基礎産業は十分に重視されていないということを問題として指摘した。その対策の一つとして、「攀枝花で鉄鋼工場の建設を決意しなければならない。我々の給料を建設に充てよ。（中略）北京で何か問題が起きたにしても、攀枝花さえあれば問題を解決できるはずだ。攀枝花では、鉄鋼工場だけではなく、交通、石炭、電力の建設も行うべきだ」と強調した。

同年六月、政治局常委において、毛沢東は再び「第三線が不可欠だ。スピーディに進める必要があるが、手抜きをしてはいけない（要搞快些，但不要潦草）」と指示した。

同年八月には、中共中央書記処会議において、「攀枝花は戦略の問題で、鉄鋼の問題ではない（攀枝花是戰略問題，不是鉄鋼問題）。」と指摘した。

同年九月、毛沢東は西南地域での鉄道建設に言及した際に、「攀枝花を建設しないのは理に叶っていない。攀枝花に鉄鉱石があることを早くから知っていたのに、なぜ建設を進めなかったのか？！もし建設する資金がないと言われたら、私の原稿料で充ててください（不搞攀枝花，这是没有道理的。不是早知道攀枝花有鉄嘛，为什么不搞？！如果说没有投資，可以把我的稿费拿出来。）」と話した。

また建設地の選定においても、毛沢東は重要な役割を果たしたことがうかがえた。調査チームの調査結果に基づいて、候補は一八箇所から攀枝花弄弄坪と楽山太平場の二箇所に絞られたが、結論はなかなか下されなかったという。一九六四年八月、毛沢東は鉄鋼基地選定の報告書を受け、この二箇所を分析した結果、「攀枝花には鉄鉱石も石炭もあるのに、なぜ工場を建てることのできないのか？釘を攀枝花に打ちつけよ（釘子就要釘在攀枝花）」と指摘した。結局、毛の指示に従って、攀枝花弄弄坪に鉄鋼工場を建設すると決められた。

一九六五年三月四日、毛沢東は攀枝花工業開発建設に関する報告書に「この件は良い（此件很好）」とコメントをした。これを契機に、攀枝花鉄鋼工業基地建設のブームがさらに盛り上がってきた。また現在、三月四日は攀枝花市の「建市記念日」とされていることの由来もこれを記念したためである。

上述した攀枝花鉄鋼工業基地建設に関する毛沢東の意見から、彼が攀枝花での鉄鋼工業基地の建設を非常に重視していたことがうかがえた。これらの毛の発言はほぼ一九六四年に集中していて、その年から開始されることになる攀枝花鉄鋼工業基地建設の起爆剤になったと言っても過言ではない。さらに強調したいのは、当時の中国においては、絶対的な支配力をもつ毛沢東の言葉はプロバガンダ・スローガンとして攀枝花製鉄工場の隅々まで浸透されていて、政策移民たちの頭を洗脳したかのように根強く刻まれ、特に次節で考察する移民たちによる書かれた私信においても度々言及されてきたのである。

四. 私信集からみたアイデンティティの形成

『攀枝花三線移民家書選』は中共攀枝花市委党校、三線建設幹部学院、中共攀枝花市委老幹部局および中共攀枝花市委党史研究室による共同で編集され、二〇二一年に出版された書物である。この四つの部門は編集委員会を結成し、二〇二〇年三月二十日に『攀枝花日報』という新聞で私信を募集する記事を掲載した。三月二十日から五月二十日にかけての二ヶ月、全国から攀枝花建設に参加した本人がその家族・友人に宛てた私信や、家族・友人による建設者への私信を募集しているということであった。その結果、一九六五年から一九八〇年までの私信が三五通収録され、また一通ごとに私信と関わる政策移民の職歴と、編集者のコメントをつけた形式で、翌年の二〇二一年に『攀枝花三線移民家書選』として出版された。そのうち、政策移民の家族や友人から提供された私信は五通で、他の三〇通は移民から家族や友人への私信である。短い期間の収集で手紙は量的にはかなり少なく、質的にも不足なところが多いにもかかわらず、当時の職場環境及び鉄鋼基地に参加した政策移民の生活状況を部分的に反映することができると思われる。本稿では、これらの私信の解説を通して、当時の政策移民が奮闘していた建設現場、および生活状況を再現しつつ、彼らがいかに個人、他者、国家という三つのレベルからアイデンティティを形成してきたのかを考察する。

(一) 個人的自己の形成—光榮な三線建設者

ほとんどの私信においては、厳しい自然環境と過酷な生産労働が記述されている。自然環境について、「山々に野草が一面に広がっていて、何もありません」(『攀枝花三線移民家書選』第1通: 3頁、以下では『家書選』に省略する)と無毛な荒地が描きだされている。こうした厳しい自然環境のなかで、彼らを待ち受けるのは過酷な生活環境であった。「食事はほとんど外で食べます。ここでは風が強くて、砂混じりの食事しかありません。(中略)山には井戸水がなくて、金沙江(揚子江の上流)へ水汲みに行かないといけません」(第1通: 3頁)、「金沙江の水は汚れた泥水で、明礬(みょうばん、水の清澄剤)で沈殿させないと使用できません。一鉢の水で朝に顔を洗い、昼に体を拭き、夜に足を洗います。水が油のように貴重です」(第6通: 29頁)。さらに様々な「大会戦」のための過酷な仕事も移民たちには強いられていた。例えば、「私たちは毎日少なくとも八時間働かなければなりません。その上に二時間の義務労働が課されます。さらに休まずに二四時間仕事をする日もあります」(第2通: 7頁)と移民たちは過労な仕事の様子などを記述していた。

このような厳しい自然環境と課された重労働は、移民たちにとって完全に想定外のことであったようである。それにもかかわらず、この出版物に収集された移民たちの手紙においては、厳しい状況を述べた後、往々にして困難に負けない建設者としての前向きな姿勢が示されている。「みんなやる気が非常に大きくて、絶えず続くような力が一杯あります」(第7通: 35頁)

や、「この困難な環境の中で、苦しいと言っていた人は一人もいません」（第10通：50頁）などである。さらに、過酷な生活から生み出された慣用句「天を掛け布団に、地をベッドにする（天做鋪盖，地做床）」や、「三つの石で窯に鍋を支える、テントは山のくぼみに立てられる（三块石头架口锅，帐篷搭在山窝窝）」（第6通：29頁）は、政策移民の生活を生々しく再現しつつ、彼らがどのように自然を生かしながら生き抜いてきたかを示している。

三線建設のスローガン「備戦備荒为人民、好人好马上三線（人民のために戦争に備え、飢饉に備え、よい人材、よい設備は三線建設へ行こう）」で宣伝されたように、政策移民はとりわけ自ら三線建設の建設者としての誇りを内面化したようである。「私たちは六〇年代の熱血青年で、党の呼びかけに応じて三線建設に参加することは、非常に高い誇りを感じさせました」（第7通：36頁）などである。そのうち、技術者や部門管理人のような技術や「私は鞍山鉄鋼での優れた仕事と豊かな生活を放棄し、自ら志願で三線建設に来たのです。（中略）私たちは（攀枝花基地の）生産建設に参加する最初の技術者グループです。このことを非常に誇りに思っています。」などである（第12通：60頁）。さらに、「私のここでの仕事には充実感があります。もう故郷の重慶に戻ろうと説得しないでください。私はここでずっと生活していきたいです。多分二〇年、三〇年、四〇年……」（第35通：165頁）と攀枝花鉄鋼基地に骨を埋めようと宣言した移民もいる。

以上のように、政策移民たちにとって、鉄鋼基地の建設に参加すること、移住前の恵まれた生活をあきらめたこと、建設現場で様々な困難を克服できたことなど、いずれもこれまで体験していなかった、独特の人生経験であった。新天地でのこれらの実践を通じて、政策移民たちは自ら「光栄な三線建設者」としての誇りを内面化し、個人的自己が形成されてきたと思われる。

（二）関係的自己の形成—生活と生産を両立できない移民

ゴッフマンは、人々が行う自己の属性の呈示と、その呈示の受け手による解釈によって、「自己」が成り立っていると指摘している（Goffman 1959=1974）。関係的自己は、他者とのつながりを通じて形成される自己の側面である。本稿では政策移民とその家族との関係を中心にこれを考察してみようとする。

私信集に収録された政策移民と彼らの家族との書簡においては、過酷な移住生活が生々しく伝えられているが、遠く離れた家族を心配させないように、自分は元気で無事であることがほとんどの私信に書かれていた。そして、選ばれた人材として攀枝花鉄鋼基地建設に参加できることは、移民本人の誇りのみならず、一家全員の誇りでもある（第19通：96頁）と表明し、また「絶対親に迷惑をかけないで、家族に恥をかかせないように」（第21通：105頁；第23通：116頁）と建設基地で懸命に働こうとする決意を表す言葉は私信でよく見受けられる。さらに、自分が「光栄な三線建設者」である立場から、過酷な建設活動を帝国主義との戦いとして神聖

化させながら、自分の甥に社会主義建設に投身するように説いた(第10通:50頁)私信もある。

一方、私信の執筆者は、鉄鋼基地の建設者であると同時に、親の子であり、子の親であり、夫や妻、また兄弟でもある。彼らが三線建設現場へ赴き、故郷で不在になったため、農作業や親の世話、また子どもの養育は故郷にいる家族に負担をかけてきた。ある母親の息子への手紙においては、農作業の大変さを訴え、移住先を「良い場所ではない」と決めつけ、「君が故郷に居ればいいのに」と息子と呼び戻したかった気持ちが示されている(第5通:23頁)。また、夫婦は長年に別々の場所に居住していて、お正月でさえも夫の帰郷を待てず、寂しさに襲われた妻の心境が次のように私信に書かれた。「すべてのことは私が一人でやるしかできなくて、分担してくれる人は一人もいない。あなたのような夫だと、私は未亡人のように、孤独を耐えなければなりません」(第29通:147頁)。政策移民たちは手紙を通して家族の苦勞が分かった。息子、娘や夫としての役割を果たせない負い目の代わりに、彼らは常に家族に仕送りをして、一家の家計をサポートしていた。例えば、「給料をもらったら、すぐお父さん、お母さんに送金します」(第1通:7頁)や、「今月はすでに20元を送金しました。これからの毎月、(両親に)生活費を送ります」(第18通:92頁)などである。

政策移民たちが、生産と生活を両立することができなかったのは想定内なことである。攀枝花製鉄所からの給料は家族に送金されたので、移民たちは確実に家族の生活を支えることができた。そのため、移住元での農作業、家事や育児の負担があったことにしても、家族にとっては、三線建設に参加するために移住したことを、家族のために出稼ぎで故郷を離れたと同じように理解していただろう。それに加えて、プロバガンダ宣伝の影響で、三線建設に参加することは本人だけではなく、家族全員の誇りでもあったと考えられていた。このように、経済的利益と精神的価値といった二つの側面における自己呈示、及びそれについての解釈、つまり「我が家の誇り」と「家計の大黒柱」であることによって、関係的自己が形成されてきたと思われる。

(三) 集団的自己の形成—集団のために個人を犠牲にする奉仕者

「集合的自己」とは、個人にとって集団や組織に対するメンバーシップの大きさに基づいて認知される自己と定義されている(Sedilides & Brewer 2001)。三線建設移民の事例においては、職場のグループから国家、さらに世界秩序における社会主義陣営まで様々な集団において、移民たちが「自分探し」をしており、異なる集団的自己を構築していたと思われる。

まず、『攀枝花三線移民家書選』に収録された私信においては、政策移民は同僚たちとの関係について、互いに職場で支え合い、励まし合う同志であり、また命を同僚に救われたことさえある、困苦をともにするパートナーでもある(第11通:54頁)ことが度々うかがえた。三線建設におけるスローガン「生産は第一、生活は第二(先生産後生活)」や「小さな家を捨てて、大きな家を守る(捨小家保大家)」で謳われたように、生活より生産が優先されており、個人

の小さな利益を犠牲にして、集団全体の大義を守るといった理念のもとで、政策移民には自分の私益より全体が重視された様子が読み解いた。例えば、たとえ自分の重ねた練習によって生産技能が向上し、職場で高く評価されたことがあっても、「この名誉は私個人の名誉ではなく、私たちチームの名誉である（這不是我各人的榮譽，是屬於我們整個小組的集體榮譽）」と、明確に所属する集団のお蔭であると表明した（第3通：12頁）。

そして、移民たちが献身的に三線建設に打ち込んだ理由は、毛沢東への崇拝によるものが多いということも、私信からうかがうことができた。毛沢東が攀枝花に直接言及した指示やエピソードは上述したように七回ある。そのうち、「攀枝花が建てられないと、私は眠れません。」との言葉に応えるように、「毛主席を安心させ、良い眠りをとることができるように（让毛主席放心，睡个好觉）」や、また「ここは毛主席にとって最も重要な場所で、その建設がうまく行かなければ、毛主席も良い眠りができません」というフレーズが政策移民の私信に最も多く書かれており、七通において同様の言及がなされている。彼らが「生活環境はこんなに厳しくても、乏しくても、毛沢東の最も関心の持つところなので、鉄鋼基地は必ず完成させなければなりません」（第6通：30頁）や、「三線基地を早く完成させ、毛主席が良い眠りをとることができるように、三線建設と国家建設に貢献しなければならない」（第11通：54頁）と強い決心が表明されている。カリスマ性をもつ政治的リーダーである毛沢東の攀枝花鉄鋼工業基地への指示は絶対的な支配力をもっていた。共同の目標である「毛主席が良い眠りをとることができるように」を目指し、国家建設に貢献して、国家的自己を構築していた。

さらに、毛沢東の三線建設への指示「三線建設の建設は、時間と速度を帝国主義と競う問題です（三線建設是同帝國主義搶時間、争速度的問題）」を自ら攀枝花建設と置き換え、「毛主席がおっしゃった『攀枝花の建設は、時間と速度を帝国主義と競う問題です』」と毛の言葉として引用して、建設に参加している自分への励みとして私信に書かれてもいる（第10通：50頁）。また重病を抱えた元指揮長は「私は年を取ったが、攀枝花の事業はまだ完成させません。（私の）子どもたちがここに來られたら、私の事業を継承することができます。共産主義が実現できるまで代々努力してほしい」と手紙に遺志を託した（第22通：110頁）。つまり、攀枝花製鉄所で奮闘することを社会主義と帝国主義との戦いの問題へと昇華させながら、移民自身は社会主義陣営の一人として集団的自己を形成してきたと考えられる。

これらの私信に書かれた記述によって、政策移民たちが自らの所属する組織のメンバーシップの大きさに基づき、異なる水準において集団的自己を構築していることがわかる。ただし、これらの集団的自己はいずれも個人的自己を犠牲にした上に成り立っており、さらに毛沢東への崇拝によって正当化、神聖化されていたことも無視できないと思われる。

五. 私信集の編集出版をめぐるポリティクス

周知の通り、私信はプライベートな文書であるため、通常では他者の目に触れることが難しいのは言うまでもない。しかし、各々の私信が収集され、再び編集され、そして出版されて世に現われたら、その編集の過程も分析の対象になりえるであろう。

この私信集は私信を収集した編集の初期段階から政治性が潜んでいたことがうかがえる。二〇二〇年三月二十日に『攀枝花日報』という新聞に三線移民の私信を募集する記事が掲載された。その募集記事の内容によると、個人と家族との往復書簡から建設者の攀枝花基地建设への愛情と思い出を探り、攀枝花基地開発の歴史を再現し、「三線精神」を継承していくために、私信を募集するという目的が明確に記されている。「三線精神」とは、「勤勉に創業し、無私の献身、団結と協力、革新する勇氣（艱苦創業、無私奉獻、団結協作、勇於創新）」という内容で具体化されるものである。現在、しばしば当時の三線建設に参加した地域の地元政府に提起され、共産党員教育や企業教育において、政治的に利用される宣伝スローガンである⁽⁶⁾。

また、この私信集は政治教育の教材であると位置づけられている。『家書選』の前置きに、「これらの私信は当時三線建設に参加した建設者の奮闘経験を再現し、移民たちの家族や国家への愛情をも色濃く表現している。これは共産主義の崇高な理想を確立し、中国の特色ある社会主義への理念を強化するための教育を実施するための最も鮮明でかつ説得力のある教材だ」と記載されている。そして、二〇二一年一月に出版されて以降、共産党員の幹部を養成する機関である攀枝花市委党校、および現地の企業や行政機関などにおいて、教材として幅広く使用されている。二〇二一年七月の攀枝花市委党校の議事録によると、『家書選』は「三線建設文化を継承する」ための教材としてすでに出版されたと記載されていた（中共攀枝花市委党校 2021）。また攀枝花経済合作局では、『家書選』を宣伝し「三線精神」を引き継ごうと明記された公文書を下位部署に配布し、所属の企業に周知させた（中共攀枝花市経済合作局 2021）。

『家書選』に収録された私信では、一通ごとに私信と関わる政策移民の職歴と、編集者のコメントをつけた形式で統一されている。記載された私信の執筆者あるいは受信者の職歴を整理したら、指揮部の元総指揮長、共産党の党書記、鉄道工事で亡くなった烈士、模範な女子従業員など、これまで表彰を受けた政策移民が四分の一を占めていて、ほかにはエンジニア、従業員、電力技師、保育士など多様であることが分かる。しかし、私信の一通ごとにつけた編集者のコメントを分析してみると、ほとんどが統一された口調で、私信に書かれた内容を繰り返した上で、建設者の苦闘経験や彼らの実践した「三線精神」を賞賛している。また現代にいる我々が参加者たちの攀枝花三線建設への貢献を忘れずに、その「三線精神」を継承していこうと呼びかける内容ばかりである。

一方、聞き取り調査によると、地元の新聞に私信を募集する記事が掲出されていたことを、知っている人は少なすぎて、また限られた二ヶ月だけの短い期間以内に、家にある私信を整理

して見つけることは不可能であったとのことである。また、何とか見つけて応募しても、採択されなかったという話も耳にした。その理由を訊ねたら、「多分『正能量⁽⁷⁾』ではないだろう」と答えてくれた。つまり採択されなかった手紙の内容は編集委員会にとって肯定的なものではなく、政治的文脈での利用に向いていないと判断されたのである。編集委員会の採択基準は公開されていなかったが、調査中に目にした貴重な五通の私信では、上述した私信と似ている内容以外に、仕事の大変さを訴え、一日でも早く攀枝花鉄鋼基地から転職したい、あるいは病気を抱えた親の見舞いに行きたくても、許可をもらえなかったりしたなどの不満を漏らしたものも確実に存在していた。

以上のように、私信の収集から、編集・出版され、また出版されて以降の現在まで、編集委員会の政治的な意図が明確にうかがえる。編集者の取捨選択によって、政治利用のために肯定的な私信が中心に収録され、前向きな解釈がつけられた。そのため、この私信集はプロパガンダと言っても過言ではない。

六. おわりに

本稿では、三線建設において最大の鉄鋼基地建設に参加した政策移民たちの私信を収録した出版物である『攀枝花三線建設家書選』を手がかりに、個人的自己、関係的自己、集団的自己という三つの水準において、政策移民がいかにアイデンティティを構築してきたのかを考察した。

政策移民たちは厳しい自然環境と過酷な生産労働を克服し、大衆運動として「大会戦」に参加させられ、「光栄な三線建設者」としての個人的自己を形成していた。各自の家庭において献身的に三線建設に打ち込んだ政策移民は、生産と生活を両立することができない境地に追い込まれた。それで、経済的利益と精神的価値といった二つの側面における自己呈示、及びそれについての解釈、つまり「我が家の誇り」と「家計の大黒柱」によって、関係的自己を形成してきたと考えられる。また、彼らは所属する組織のメンバーシップの大きさに基づき、生産チーム、国家及び社会主義陣営など異なる水準において、個人を犠牲にして集団に奉仕しようとする集団的自己を構築している。ただし、一九五〇年から一九八〇年代まで、集団体制時代の中国社会では、個人の小さな利益を犠牲にして、集団全体の大義を守るといった社会理念のもとで、集団的自己が個人的自己と関係的自己に優先されており、個人的自己と関係的自己はいずれも集団的自己の下位にあったと見ることができる。

また、これまでプライベートな文書である私信を研究対象とする研究において、あまり触れられなかった私信集の編集過程における恣意性、また出版後の政治的な利用も視野に入れて考察を行った。上文で考察した通り、編集者の意図によって取捨選択された結果、私信の中身は三線建設を賛美する内容、攀枝花鉄鋼基地建設に参加できることを誇りに思っていた内容に重

点が置かれていた。こうして民間に散在する私信が、今日における政治的な文脈に適応する政治教育の教材となってきたと分かる。それにもかかわらず、過ぎ去った時代の個人史料として私信が収録しており、中身の誤字や脱字を校正して、一通ずつコメントを付け加えた上で、出版されたこと自体は評価すべきことであると思われる。

本稿では、個人の書簡である私信、およびこれらの私信が収録された私信集を分析してみた。研究対象とされる私信は氷山の一角に過ぎず、さらに多くの事例の分析を必要とされている。人間に関するすべての事柄を研究対象とする人類学では、今後調査対象の内側に深く入り込んで理解しようとするならば、私信についての研究の進展にさらに期待できるのではないかとと思われる。

〔注〕

- (1) Erikson はアイデンティティを「自我アイデンティティ (ego identity)」と「自己アイデンティティ (self identity)」の二つの側面から考察している。前者は自我の心理・社会的機能といった統合力に焦点を当てており、後者は社会的役割や他者との関係において承認されることで確立される側面を示している。Erikson 自身は主に自我アイデンティティを研究の中心としていたものの、本稿では対他関係から形成されるアイデンティティを考察するため、自己アイデンティティを分析の対象にする。
- (2) Markus & Kitayama は、心理学の領域における文化の要因の重要性を示すために、欧米文化に代表される「相互独立的自己観 (independent self-construal)」と、日本を含む東洋で優勢な「相互協調的自己観 (interdependent self-construal)」という2つの異なる世界観 (文化的自己観) を概念化した。
- (3) この地域には元々、七世帯と「攀枝花」(別名木綿) と呼ばれる花を咲かす一本の樹木しかなかったという話がある。そのため、「攀枝花」と名付けられたとされている (朱 2020: 19頁)。
- (4) 大躍進は1958年5月の中国共産党第八期全国代表大会第二回会議にはじまる大規模な社会主義建設運動であった。そこでは、人間の能動性を最大限に発揮させることによって、工業・農業などあらゆる分野で同時的かつ飛躍的發展が試みられた。しかし、非科学的な増産方法は中国国内で大混乱を引き起こした。1959年から1961年にかけての三年間は、旱魃などの自然災害に加え、大躍進による食糧不足が組み合わさり、多くの餓死者を出す大飢饉が発生した。中国政府は1981年まで、この三年を「三年自然災害」と称した。
- (5) 1969年3月、中国とソ連の国境になっているウスリー川上の珍宝島 (ロシア名ダマンスキー島) の領有を巡って、中ソ国境警備隊同士が衝突した事件があった。これはダマンスキー島事件とも呼ばれている。
- (6) 1984年2月9日、攀枝花で行われた第1回労働模範表彰大会において、はじめて「攀枝花精神」が提唱された。これは「艱苦創業、無私奉獻、開拓進取、團結協作、科学求实 (勤勉に創業し、無私の献身、開拓と進取、團結と協力、科学的な態度で真実を求める)」という五つの側面包括的に要約されていた。1993年4月、当時の中共中央総書記であった江沢民は今日における「三線精神」を継承することの重要性を強調した。それ以降、「三線精神」という用語が徐々に広がった。2014年3月23日、中華人民共和国国家史学会三線建設研究分会が北京で成立した。大会では「三線精神」の内容が明確に打ち出された。
- (7) 「正能量」とは、「プラスのエネルギー」を指し、前向き、肯定的な意味合いで使われる言葉である。2012年には中国のネット上で10大流行語の一つとして選出された。

〔参考文献〕

〈日文〉

- Erikson, E. H. 1959 *Psychological Issues : Identity and the Life Cycle*. International Universities Press.
（西平直、中島由恵訳（2011）アイデンティティとライフサイクル、誠信書房）
- Goffman, E. 1959 *The Presentation of Self in Everyday Life*, Doubleday & Company, Inc.（石黒毅訳（1974）．行為と演技—日常生活における自己呈示、誠信書房．）
- 呉曉林 2002『毛沢東時代の工業化戦略—三線建設の政治経済学』、御茶ノ水書房。
- 谷口佳子 1986「マリノフスキー：『日記』と彼をめぐる女性達」、『共栄学園大学研究紀要』第2号、55～72頁。
- フランク・ディケーター（中川治子訳）2011『毛沢東の大飢饉—史上最も悲惨で破壊的な人災1958～1962』、草思社
- 峯崎寛子 2013「ディアスポラの信仰者：在日アフマディーヤ・ムスリムにみるグローバル状況下のアイデンティティ」、『文化人類学』78（2）、204～224頁。

〈中文〉

- 渡口総指揮部 1967「渡口総指揮部關於1966年基建投資、統合統計年報」、攀枝花檔案館館藏。
- 呂建昌、莫興偉編 2021『激情歲月的記憶—聚焦三線建設親歷者』、上海大学出版社。
- 馬泉山 1998『新中国工業經濟史』（1966～1978）、經濟管理出版社。
- 『三線建設』編写組 1991『三線建設』、内部発行。
- 四川省攀枝花市誌編纂委員會 2007『攀枝花市誌』、中国廣播電視出版社。
- 譚深 1998「打工妹的内部話題—对深圳原致麗玩具廠百餘封書信的分析」、『社会学研究』第6期：63～73頁。
- 魏瀾、張樂天 2021「家庭本位的“關係”實踐：私人書信中的家庭主義圖像（1972-1995年）」、『社会』第41卷、27～55頁。
- 向東 2010『20世紀六七十年代攀枝花地區三線建設述論』、碩士論文、四川師範大学。
- 張樂天 2017「“希望的魔力”：中国青年知識分子的自我建構—以1950年代的書信為例」、『探索と争鳴』（2）、104～112頁。
- 張明 2021「毛澤東与新中国鉄鋼工業的發展」、『党史博覽』第8期、4～10頁。
- 中共攀枝花市委党校、三線建設幹部学院、中共攀枝花市委老干部局、中共攀枝花市委党史研究室編（2021）『攀枝花三線移民家書選』、西南交通大学出版社。
- 中共攀枝花市委党校 2021「中共攀枝花市委党校对市政协九届五次會議第154号提案答复的函（2021年7月20日）」
- 中共攀枝花經濟合作局 2021「中共攀枝花經濟合作局党組文件第（2021）38号（2021年7月21日）」
- 鐘少曦 2016年「毛沢東与攀枝花建設」、『攀枝花日報』2016年12月26日。
- 朱雲生、何悅編（二〇二〇）『三線建設之光——英雄攀枝花的三線情緣』、四川大学出版社。

〈英文〉

- Geertz, Clifford. 1976 “From the Native’s Point of View” in K. H. Basso & H. A. Selby eds., *Meaning in Anthropology*, Albuquerque, University of New Mexico Press.
- Li, Tian and Yunxiang Yan. 2019 “Self-Cultivation of the Socialist New Person in Maoist China: Evidence from a Family’s Private Letters, 1961-1986.” *The China Journal* 82 (1):88-110.
- Markus, H. R. & Kitayama, S. 1991 Culture and the self: Implication for cognition, emotion and motivation. *Journal of personality and social psychology*, 98, 224-253.
- Sedikedes, C. & Brewer, M. B. 2001 *Individual Self, Relational Self, Collective Self*, Psychology Press.
- Stanley, L. 2004 “The Epistolarium: On Theorizing Letters and Correspondences.” *Auto/Biography* 12: 201-235.

【付記】

本稿は JSPS 科学研究費21K01089の交付を受けて行った研究成果の一部である。

(そん けつ 中国学科)

2023年11月15日受理